miyagi prefecture forest instructors association

mifi news

宮城県森林インストラクター協会

写真：仙台大学附属明成高等学校海岸防災林活動

巻頭言

会長　１４期　髙橋　孝紀

人間には生まれ持った天敵がおりません。それは、生まれた時から決められた特定の相手ではなく、体験の中で恐ろしいと感じたものを避け、その後も学習を積み重ねる中で自分を守れという教えのようです。つまり、恐ろしいと思うものは人によっても、生きてきた環境によっても異なります。環境そのものも常に変わっていくもので、変化に対応できる生き方をせよというメッセージでもあるようです。だから人間は哺乳類の中でも大人になるまでの期間が、飛びぬけて長く育児に時間がかかります。

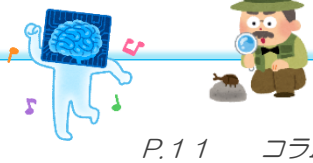
トンボはブルーシートを水たまりと思い込み卵を産んだりします。これは産卵時期に青いものを見たら水たまりと思えと生まれた時から本能という形でインプットされているからのようです。生まれたてのアヒルが近くで作業する人の動く長靴を見て、母親と思う刷り込み現象もこれに近いものがあります。

生まれた時からあらかじめインプットされたものが多い生物ほど、ルーティーンの行動が多く、次の世代を産み落とせば、まもなく死が訪れその生涯が終わってしまいます。人間は若年期の長い学習期間をもつと共に、人生後半の長い老いの期間を併せ持つ極めて稀有な生物でもあります。自然界の中では様々な生物が熾烈な生存競争をしている中、老いという平和な時期があるという事は、ある意味有難いことでもあります。だからこそ私たちは、かつて学習した様々な経験を次世代に伝える責務を担っております。

今期も新しい協会メンバーが様々な協会活動に参加頂いております。これから迎える本格的な秋の活動に向けて、私たちも共に切磋琢磨し、「一人の百歩より百人の一歩」を目指し、協会の蓄積された暗黙知を共有できればと思います。

87

令和５年9月発行



P.１　巻頭言
P.２　きかくがいろん
P.３―４　活動報告
P.５　施設だより
P.６―７　活動報告
P.８　七ツ森の魅力
P.９　七ヶ浜よいとこ
P.１０　リレー式／安全
P.１１　コラム／理事紹介／編集後記
P.１２　活動写真館

Gekiron! きかくがいろんBouron!

～　ミニエッセイ集　何とかならないかなぁ～

１期　木村　健太郎

待ちに待ったマスク外しての活動！　しかし、いろいろ元に戻ったら、やることが多すぎてみんなお疲れ気味です。うまくいかないものですね。こんな状況で秋を乗り切れるのか、最近の活動事情いろいろです。

【夜の貞山運河】

もともと夜釣りが大好きで、気晴らしに近くの漁港や河口をウロウロすることが多いのですが、最近は生き物観察にハマっています。

きっかけは、七北田川河口の暗闇の中でセイゴ釣りをしていた時のことです。足元でカニがうるさいのでライトで照らしてみたら、カニ好きの私でも気持ち悪くなるくらいのクロベンケイガニの大群に囲まれていました。川の中には、カニのほかにスジエビと小さなハゼ・チチブがたくさん。幻想的な小世界が形成されています。それからは、釣りよりもライトを持って汽水域の浅瀬を回るのが楽しくなりました。

貞山運河は、震災後たくさんの石を入れたのが良かったのか、石の間にたくさんの生き物が住んでいます。大きなハゼとテナガエビは、夜になると浅い石の上をウロウロしています。やたらと多いのはウシガエルのオタマジャクシ。カエルになる直前は目が気持ち悪いのでギョッ！とします。黒い影は、太いのはたいていナマズで、細いのはニホンウナギ。石の間から首だけ出しているウナギはとても可愛いです。手が届きそうな距離ですが、ウナギは両手でも絶対に掴めません。

確かに、釣りをしていてもニホンウナギはけっこう釣れてきます。外すのが面倒なので絶対に掛かってほしくないのですが、震災後に増えた生き物のひとつです。ほかに、巨大なエイやコイやクロダイが泳いでいることもあって、大興奮してしまいます。

この世界、子どもたちに見せられたらなぁと思うのですが、足場が危険な上に居ないときは本当に何もいないので、かなり難しいです。でももったいないので、何とかならないかなぁと思っています。

【これで良いのか？　海岸防災林】

夏の海岸防災林は、あちこちで、若いクロマツ林の周囲がぶ厚いクズの海になってしまっています。場所によっては、クロマツの上がクズの海（雲？）になっています。

クズ整備の足かせになっているのが、当初、防風のために設置された「防風柵」です。「防風柵」はいまや「クズ保護柵」と化していて、無理に手を出すとアシナガバチが飛び出して襲ってくるという二重の「防衛システム」を装備しています。長い時間吸い込んでいると明らかに体調が悪くなるドクウツギの芳香も脅威です。果たして要塞のような「防風柵」が必要だったのか、検証する機会は訪れるのでしょうか。

また、隙間なく植えられた結果、ギュウギュウになって苦しそうなクロマツの下部の枝は枯れてしまっていて、可哀そうで見ていられなくなってきました。

果たして、この状況は「予定通り」なのでしょうか。聞いても教えてくれる人はいません。まだまだ、立派な「海岸防災林」として成林した姿を想像できませんが、これでいいのかどうか、もはや分かる人がいないのかもしれません。「手入れ」しなければ大変なことになりそうで、でもどうしたら良いのか分からない海岸防災林、何とかならないかなぁと日々悩んでいます。

【猛暑対策】

お盆中、かなり久しぶりに埼玉県へ行ってきました。「暑さ」には強いので３５℃超でも心配していませんでしたが、電車の中も、どのお店もクーラーが強いので、むしろ「寒さ」を感じるほうが多かったです。

ただ、歩道を歩いていて、「暑さ」の質が違う印象を受けました。「暑さ」が太陽光によるものでなく、人工的な「暑さ」です。街全体でクーラーをかけまくって、全面コンクリート、街路樹も日陰をつくらない形状なので、「暑さ」が不快で気持ち悪いのです。

さらに驚いたのは、ほとんど虫に出会わないことです。朝霞のラウンドワンに遊びに行ったとき、若い集団が小バエ１匹にキャーキャー言っていたのでびっくりしました。自然をシャットアウトしようとして、結果的に「暑くなるための街づくり」をしてしまったように見えます。

自分たちの都合と嗜好に合わせて無理やり環境を作り変えるのでは、昔のヨーロッパ人と同じです。地球の環境はめまぐるしく変化します。環境に合わせて自分を鍛え変えていくことができない生き物は絶滅してきたわけですから、私たちも、もう少し環境の変化に合わせていく努力が必要ではないでしょうか。もはや、少しずつＣＯ２を減らしましょう、などという段階ではないでしょう。

この暑かった夏、最も涼しく感じたのは、海岸林の残存緑地内のクロマツ林の中です。あらためて、「涼しさ」は気温や湿度よりも「心地よさ」が大切なのだと実感しました。これからの街づくりのヒントにならないでしょうか。

協会は、多くの企業の皆さんと共に活動をしています。森林づくり活動への感想をお聞きしました。

子どもたちと共に次世代につなぐ森林づくり「そらっぱの森」

ネッツトヨタ仙台㈱さんの「そらっこくらぶ」の立ち上げから担当している高橋さんと守さんにお話を伺いました。

「そらっこくらぶ」は、２０１４年にスタート。東日本大震災で甚大な被害を受けて社会全体が暗く重く沈んだ雰囲気の中、何か元気づけ勇気を出せる取組みはないものかと始めたのだそうです。

「そらっこくらぶ」は０才から小学校６年生までのお子さんがいるお客様のご家族が対象です。スタートから１０年で、登録した子どもの数は約３５００人！にも。子どもたちが様々な体験を通じて成長する一助となることを願って、毎月様々なイベントを企画しているそうです。

中でも防災林再生プロジェクト「そらっぱの森」は「子どもたちの未来づくり・地域づくり」への取組みの一環として、次の世代に残せることが何かないだろうかという想いから始めました。未来を担う子どもたちと共に人々が安心して暮らせる地域社会を築いていきたいと考えているそうです。２０１５年から東松島大曲、岩沼市寺島、仙台市荒浜等での植樹は１万本にもなりました。立派な防災林に成長するまでには多くの手間と長い年月を要します。保育活動を続けていくことで、次の世代へ伝えつなげていくことの大切さが子どもたちの心に芽生え育っていくことを願っているそうです。

協会とは春夏秋と活動を共にしていますが、「そらっぱの森」の活動は、家族だけではできない自然の中での遊びや体験ができると大人気、参加は毎回抽選だそうで、楽しみにして繰り返し参加するご家族も多いとのこと。また、運営スタッフの補助として新入社員も参加しています。協会の皆さんの仲間にしてもらって共に楽しく子どもたちを育てていきたいとのことでした。

「そらっこくらぶ」を担当している高橋さんと守さん親子

よみがえれ白砂青松「夢た～んとダイハツの森」

宮城ダイハツ販売㈱さんは令和３年７月から みやぎ海岸林再生みんなの森林づくり活動に参加し、気仙沼市岩井崎地区と岩沼市寺島地区で海岸防災林の保育活動を展開。夏は気仙沼、秋は岩沼で年に２回の保育活動をしています。８月１日の活動に参加した溝田社長にお話を伺いました。

森林づくり活動に取り組むきっかけとなったのはある社員の想いだそうです。静岡県伊豆から転勤してきた社員が、甚大な被害を受けた宮城の海岸線を見て、「海には松林が似合う、伊豆に広がっているような白砂青松を取り戻したい」という熱意が始まりでした。社名に「宮城」を冠する会社であり、これまでも普段の営業活動とは別に、地元の皆さんにお役に立つことは何かということを考え、できることから社会貢献活動を始めてきました。女子サッカーへの支援や小学生バトミントン大会のサポート、フードバンクへの協力や地域の清掃活動等地域に根ざした様々な活動をしています。中でも、「夢た～んとダイハツの森」の活動は、唯一社員が子どもと共に参加し楽しめる活動なので人気だそうです。

当日も県内各地の全社から参加があり、あちこちから「久しぶり、元気だった？大きくなったね？」という和やかな声が飛び交い、名刺交換をする様子も見られ、コミュニケーションの場ともなっている様子がうかがい知れました。

当協会は海岸防災林の保育指導や自然体験活動で協力していますが、社員の皆さんのパワフルな活躍ぶりに驚いています。仕事とは異次元の自然に触れる活動は仕事面にも新たな活力となるようでした。

アスリートの溝田社長は 11 月の東北・みやぎ復興マラソンにもエントリーされているとのことで植樹後もランニングしながら子どもたちの様子を見守っていました。「安全に楽しく活動を終えたことが何よりであり、指導からレクリエーションの準備まで何もかもお手伝いいただいている協会の皆さんには感謝しかありません」とありがたいお言葉をいただきました。次世代の子どもたちに豊かな緑を残せる様、毎年保育活動を行い、大切に育てていくそうです。

紙上講座　テナガエビ釣り

７月 22 日（土）、仙台市海岸公園センターハウスに集合し、貞山運河で、のべ竿を使ったミャク釣り（※）仕掛けでテナガエビ釣りと汽水域の生きもの観察の研修会を行いました。紙上研修として報告します。

テナガエビはもともと関東以西の生きものと思われていて、宮城県で釣りの対象となることはありませんでしたが、東日本大震災以降、貞山運河を主体に突然増えました。津波による撹拌と、復興整備で偶然生育環境が整ったことが原因だと考えられています。現在では、ハゼと並んで汽水の人気のターゲットとなっています。５月後半から９月までの水温が上がる時期がシーズンです。

▶生態

生息地は淡水～汽水。産卵は通常汽水で行われ、孵化したゾエア幼生はすぐに海に下り、１カ月ほど海で成長します。稚エビの形になったら河口から汽水域にのぼり、あとは１～３年ほど、汽水域か淡水域で一生を終えます。生息地が陸封の場合、淡水域で一生生活するタイプもいます。食性はほぼ肉食で、魚や動物の死骸や生きた魚やエビ、ゴカイ類、ミミズ等、蛋白質ならほぼ何でも食べ、共食いもします。基本的に夜行性で、昼間は石や藻の陰など暗い場所から出てきません。夜間は積極的に川底を歩いてエサをさがします。寒さは苦手で１０月頃で貞山運河からは姿を消します。冬場の行動についてはまだ分かっていません。

▶生育場所

七北田川から阿武隈川までの貞山運河、七北田川、名取川、阿武隈川の各河口、貞山運河支流の五間堀川、八間堀川で確認しています。仙台港から塩竈港間の貞山運河、高城川、東明運河、北上運河、鳴瀬川河口、定川などではまだ確認されていませんが、見つけたら情報提供お願いします。

▶釣り方

昼間は石の間などできるだけ暗いところを狙いますが、夜間はどこでも OK です。エサが底につくように仕掛けを投入し、ウキ目印の動きと手の感覚に注意してアタリを待ちます。アタリは、横にスーっと引き込まれる感じが多いです。糸を張ったときに、尾の力で後方に下がるようにツーッツーッと引き込んだらテナガエビの可能性が高いです。針が内に掛かるまで 15 秒程待ってから、石の間から引き抜くようにゆっくりと上げましょう。待ちすぎると、巣穴にもぐられて根掛かり状態となります。釣り上げたら、ピンセットなどでハリを外し、エアポンプ等でできるだけ生かしておきましょう。死にそうだったら、すぐに氷の入ったクーラーに入れないとすぐに鮮度が落ちます。

エサはアカムシ、アオイソメ、ミミズなどを小さく。魚の切り身、イカ、カマボコなどでも釣れます。安上がりなのは、打ち上げられた海藻の下にいるウジ虫。

※ミャク釣りとは、のべ竿（リールやガイドが付いておらず、竿先に釣り糸を結んで使うタイプの釣竿）を用い、軽いオモリを付けた仕掛で、糸の変化や竿・指先へのあたりを感じて釣る釣法

子どもたちの引率で何度か釣りの場にいたことはありますが、竿を持つのはほぼ初めて。気落ち悪いアオイソメをなんとかちぎるまではできていたのですが、付け方が下手でエサを取られることばかり。気持ち悪さに打ち勝ってハリにしっかりアオイソメを刺せるようになったら、アタリがきました！研修に参加したのは 13 名。残念ながら当日は不漁で 4 匹釣り上げた人が最高でした。通常は晩酌のおかずに十分な 10 匹程度は釣れるそう。飲み屋のメニューの川エビの唐揚げというのがテナガエビとのことです。調理方法は、まさくんに聞いてね。

（２期　進藤恵美）

自主企画の紹介

県民の森管理事務所次長　　１７期　森谷　清一

多くの方に県民の森に気軽に足を運んで頂けるよう様々なイベントが開催されていますが、その一部を紹介します。

毎月のように定期的に開催されるイベントは、７つ。植物や野鳥などの自然観察会中心が５コース、健康・体力向上のための「ノルディックウォーキング」、森の恵みを活用したクラフト体験の「Let’ｓクラフト」で全７コースとなっています。

植物を中心としたものでは、特段テーマを設けず園内を歩く「もりの案内」はどんな植物に出会えるか期待わくわくです。又毎回テーマを設定し初心者向けに開催する「森と遊ぼう！」は草木遊びやスケッチタイムを設けての楽しい講座です。季節の移り変わりを探し求める「県民の森ハイク」はたっぷりと時間を取っているため運動も兼ねて植物好きにはたまりません。

「森の癒し体験」は森が持っている不思議な力を体感できるユニークな企画です。コロナのため現在中断していますが、ストレス測定が再開されれば完璧となります。

最後に野鳥に特化した「野鳥クラブ」も観察会ばかりでなく一部クラフトを取り入れて人気のコースです。

開催日も平日から土日中心と多岐にわたっており、都合の良い時にご参加いただけるよう配慮しております。各イベントとも一般参加者が対象ですが、養成講座で学んだがもう少し勉強したいという方は是非参加してみてはいかがでしょうか。協会活動でのスキルアップにつながりますので、県民の森イベントを活用してみてください。

上記以外でも毎月ではありませんが、「剪定講習会」、「岩切城址の歴史散策」、「ネイチャーフォト教室」も開催されております。

【Let’ｓクラフトで水鉄砲作り】

【ノルディックウォーキング】

「ことりはうす」の夏のイベントは大盛況

ことりはうす次長　２０期　鳴海　文夫

ことりはうすの夏休み企画のイベントは今年も大盛況です。

夜の野鳥の森を歩いて動物の気配を感じる「ナイトハイキング」、子どもが大好きな昆虫を捕まえる「カブトムシみっけ隊」、「クワガタムシつかまえ隊」、沢でニジマスを捕まえる「沢遊び」は、ＨＰにスケジュールをアップしたとたんに定員に達する状況です。

今年のナイトハイキングは小雨のため森に住む動物に会えませんでしたが、ヒメボタルを観察することができて子どもたちは大喜びでした。

【クワガタみっけ！】

カブトムシみっけ隊とクワガタムシつかまえ隊に参加して頂いた方は、意外にも初めてではなく何度か参加してくださっているようで、昨年参加して虫の「繁殖に成功しました」という嬉しい声もたくさん聞くことができました。

沢遊びでは、ことりはうすに隣接する沢に放したニジマスを子どもたちに捕まえてもらった後に、串に通して炭火でじっくり焼きます。炭火で焼いたニジマスは頭から尻尾、骨まで食べられます。魚が苦手な子でも、親がびっくりするほど、おいしいと食べてくれます。今年は猛暑のため沢に行くとひんやりして、空気がぜんぜん違います。子どもたちは、コツを掴むまで何度も逃げられながら、楽しんでニジマスを追いかけていました。

夏休み限定で行っている４つのイベントは、人気イベントのためＨＰにスケジュールをアップしたとたんに定員となってしまいます。追加で行ってほしいという声が多数聞かれますが、老体スタッフには今年の炎天下は非常に応えます。ギリギリの状態で子どもたちのために頑張っています。

【ニジマスは何処だ！】

ふれあい森林教室　あけの平子ども会

２期　進藤　恵美

７月１６日（日）、 富谷市あけの平子ども会の親子２５名がふれあい森林教室にやってきました。ふれあい森林教室に子ども会を迎えるのは初めてです。参加のきっかけは、西コミ自然ふれあい学校。「こんなに楽しい体験を他の子どもたちにもさせたい」という保護者の希望が実現したものです。

「ESD 学びの森」作業道にマイクロバスで到着した子どもたちを、引率担当会員が迎えました。未就学児から中学生までと幅広い年齢層の子どもたちをいかに楽しませるか。葉っぱ遊びをしたり、くっつく草をさがしたり、やじろべえを作ったり、虫を探したりと、森の中で遊びを見つけながら森づくり体験に向かいました。のこぎりを使ったり、スコップを使ってカブトムシ幼虫の家を作ったり、ロープブランコで爽快な気分を味わったり、どれも初めて体験することばかりで子どもたちは目を輝かせて取り組んでいました。片や会員は、多湿のためヤブ蚊が多いので森に深入りさせないという配慮と、熱中症になっていないかの目配りがかかせません。

午後はクラフトと夏の恒例、水遊び。子どもたちは何ができるんだろうかと好奇心が止りません。びしょ濡れになることが予想されるので先ずは、クラフト。６年生の子は全６種類、全部作ったと満足そうでした。作れるのは子どものみなので親たちは興味津々で見入っていました。水遊びは例により大暴れ、きょうじゅを敵と見立てたか、子どもたちの攻撃が容赦ありません。着替えを持ってくれば良かったとうらやましそう見る父親たちも。「自然の中で思う存分動き、大声を出し、とっても楽しかった、久しぶりに開放的な気分を味わえた」と子どもたちは大満足。

きょうじゅからは「ひとりで大勢の子どもを相手にするのは辛かった、だれの援護もなかった･･･、完全防備の準備をしてぜひ参戦して欲しい」とのメッセージを受けましたヨ。

もりもり教室「カニ　おさかな」

１１期　鈴木　武

７月１７日（日）、天気予報でこの夏一番の３４．９℃の予報が出る中３０人の元気な親子が集合しました。初めに「熱中症にならぬよう十分な水分を取りながら活動しましょう。」との注意の後、「今日は苗畑前の池にいって水生動物を網ですくって森林学習館に持ち帰り、その後、森林学習館でおさかななどの飼い方を学んで好きな水生動物を家に持ち帰り飼育しましょう。」の話があり畑苗前の池に移動しました。池は日陰で水量も豊かで水生動物の採取には活動しやすい環境でした。子どもたちは何度も網を入れてイモリ・サンショウウオ・足が生え揃いすぐにでもカエルになりそうなオタマジャクシ・コオイムシ・ヤゴなどの水生動物を捕まえ森林学習館に運びました。森林学習館では**けんたろす**から「スポーツ飲料と経口補水液の違い」や「水の生き物の特徴と飼い方についてプリントを使って具体的な説明」があり真剣に聴いていました。この後スタッフが事前に準備していた魚（ギンブナ・モツゴ・ドジョウ・ヨシノボリ・ウナギなど）カニ（クロベンケイガニ・アシハラガニなど）池で取ってきた水生生物（イモリ・サンショウウオ・オタマジャクシ・コイムシ・ヤゴなど）の中から自分で飼ってみたいものを選ぶことになりました。魚を見たり、カニを見たり、ウナギつかみに挑戦したり、自分たちで捕ってきた水生動物をみたりして、親とよく相談して飼育してみたい動物を水槽やビニール袋に入れて持ち帰りました。大きいものより小さいものを持ち帰った家族が多かった印象でした。

夢た～んとダイハツの森　～気仙沼市岩井崎海岸防災林保育活動～

８月１日（火）岩井崎海岸「夢た～んとダイハツの森」で宮城ダイハツ販売（株)の社員の皆さん・ご家族と共に保育活動を行いました。南は大河原から気仙沼まで県内全域の事業所から９３名が参加しました。当日のスケジュールは、除草作業と、自由参加となるクラフト製作・インストラクターとの海遊び。先ず大人４班・子ども連れの家族班４班の計８班体制で草刈りに取りかかりました。連日の猛暑もこの日は和らぎ、ギラギラした日差しもなく絶好の活動コンディション。とはいえ暑い、暑い！汗が噴き出しました。自宅から愛用のカマを持参した社員さんもいて、パワフルな皆さんのおかげで１時間の予定時間内ですっかり除草が完了、一昨年植樹したマツたちはすっきりとした姿を現しました。事前にハチの巣をチェックしていたため、ハチに襲われる被害もなく安全に作業を終了しました。

閉会式でいったん解散、その後もたくさんの家族がレクリエーション活動に参加してくれました。しかし、み～んな海へ。クラフト担当者はぽつんと残され手持ちぶさた。海担当のカニ・石・貝コースは防潮堤を下りてテトラポットの海岸で生きもの探し。潮目が悪く、なかなか生きものが見つかりません。しかし、そこは凄腕インストラクターたち、見事にカニやらヤドカリやらヒトデやら小魚を発見して面目躍如でした。釣コースはお伊勢浜の杉の下漁港近くで釣り糸を垂らしました。こちらは大漁、全員が釣り上げました。成果を上げて駐車場への帰路でようやくクラフト担当の出番。たくさんのお土産を手に元気に子どもたちは帰って行きました。片付けを終えたスタッフは防潮堤に上がってきれいに除草された植樹地を眺めながらのランチタイム。植樹地のはるか隣には震災遺構の伝承館が見えました。

そらっぱ夏祭り in 県民の森 2023

８月２０日（日）、この夏最大のイベント「そらっぱ夏祭り」が開かれました。参加者は、そらっこクラブの親子23世帯80名に加え、ネッツトヨタ仙台（株）さんの新入社員。対応する当協会インストラクターも３０名と久しぶりに１００名越えの大イベント。

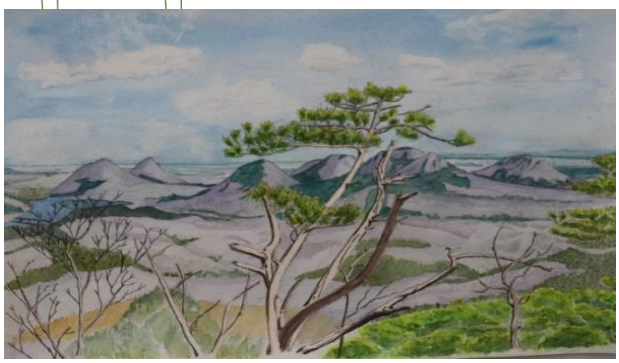
そらっぱ方式で三々五々に来場する家族を引率担当者が案内して青少年の森で自然遊びを体験しました。スラックライン、ターザンロープ、ペットロケット飛ばし、モルックならぬペルック（ペットボトルで作ったので）、がけのぼり、バスケット、バトミントン、ジャグリング、水鉄砲、笛作り、ひのきさん、水の生きものさがしや虫捕りとたくさんのメニューがあり、目一杯駆け回りました。昼食後はかき氷が登場。ほてった体も冷え子どもたちは元気百倍で午後の活動にダッシュ。ネイチャークラフトが１１種類、生きものコーナーでは、ミニつりぼり、クロベンケイガニとり、水遊びコーナーにはスーパーボールつり、水よーよーづくりと本気の水鉄砲、落ちたら水浸しのターザンロープ、バットを作っての Ｔ バッティング。青少年の森に生き生きとした格別の笑顔があふれました。参加者からは、「家族ではなかなかこれだけの遊びを自然の中で体験させてあげることができないのでありがたい」、「クラフトは毎回工夫があって他では見られないものが作れる」、「子どもたちが思いっきり体を動かしている様子や夢中でクラフトを作っている姿を見るのは嬉しい」、「一緒に体験できることも多く親も楽しんでいる」、「親子でこれらの活動が共有話題となり、会話が弾む」などとの声がありました。リピーターも多い様子でした。子どもたちが帰った後にも、新入社員に対しての『森づくり体験』指導。草刈りや枝打ちもしたのですよ。子どもたちに負けないパワフルな会員でした。　（報告：進藤・小島）

七ツ森の魅力

七ツ森の懐には、今年度新たに 2 社の企業が加わり、企業の森が広がりを見せています。85 号で“七ツ森が熱い“と紹介され、86 号では荒れた七ツ森が整備されていく様子が描かれていました。今後重要な活動拠点と形作られていきますが、さて、この地が七ツ森と呼ばれる由来、楽しみ、そして、素敵な活動拠点となるよう整備する醍醐味をご紹介します。

七ツ森の四季

１７期　千葉　惠右



大森山(笹倉山)からの春浅い七ツ森

仙台から国道４号を北に向かうと、大和町吉岡あたりで左手にお伽噺に出てくるような丸い山がポコンポコンと見えてきます。昔、朝比奈三郎という力持ちの大男が弓の稽古をする的山を作るために大谷（今の鹿島台あたり）からタンガラに土を入れて７回運び作ったのが今の七ツ森とする伝説が残っています。七ツ森の各山頂には薬師如来が祀られています。宮床伊達家家臣の八巻親子が担ぎあげて祀ったと言われており、昔は旧暦の４月８日に一日で詣でると無病息災が叶うとされていました。現在は地元の宮床むらづくり委員会がそれを引き継ぎ毎年秋に開催しています。この七ツ森には遊歩道が整備されていますが、各山頂へ登るためにはロープを頼りに険しい岩場を登らなければなりません。標高こそ３００㍍前後と低いのですが結構大変です。自分の体力に合わせて２～３回に分けて登るほうがしっかり楽しむことができます。

春になると、様々な山野草が咲き始めます。カタクリやニリンソウ、イワウチワなどあちらこちらに群生地が見られます。４ 月に入ると七ツ森の草花を見に出かけます。南川ダムから一番近い鎌倉山からは、樹間越しに船形山や栗駒山が望めます。林の中には淡いピンク色のトウゴクミツバツツジがひときわ目立ちます。尾根を北に向かうとそこにはカタクリやニリンソウ、イチゲの花が広がり、楽しい散策ができます。また、夏には鎌倉山の斜面にキツネノカミソリの見事な群落が出現します。一年の締めくくりは様々な広葉樹の紅葉が待っており、四季を通じて楽しむことができます。

七ツ森の整備の醍醐味

１１ 期　後藤　政子

４月、５月とダイタンの森、てっけんの森の整備作業に参加しました。ダイタンの森はインストラクター養成講座受講時に講義を受けた場所です。ススキ野原になっていました。

てっけんの森には枯損木が多く、竹藪が森の中を流れる川を塞ぐように生い茂っていました。枯損木を伐採し笹藪を整備して作業を進めるにつれて、放置され荒れ果てていた森がだんだん明るくなり、爽やかな風が通りました。作業の汗も心地良く感じます。湿地のヤナギやカヤを刈り払い、満開の大きなヤブデマリが姿を現わしたときには、ご褒美をもらったように感動的でした。森の中にはカタクリやニリンソウの群落があり、森の中を川が流れていて、沢遊びが楽しそうな所です。子どもたちの笑顔と遊ぶ様子が思い描けました。こうして、良い汗を流し自然をたっぷり感じながら森が明るくなって行く様子を楽しみ、未来を思い描く・・・これは醍醐味です！

６月のエレクトロンの森の整備１ヶ月後に森に入って見ましたが、もう背丈までカヤが生い茂っている状態でした。里山の保育管理の必要性を実感しました。七ツ森にはカメイの森、蛇石せせらぎの森の整備作業もあります。今後もこの“熱い七ツ森”の作業に関わって行きたいと思います。何より作業後のお風呂上がりのお茶(ビールと言いたいところですが、私は強そうに見えて下戸なので・・・)は非常に美味しいです！これも醍醐味！

＝活動の拠点：七ヶ浜町を知ろう＝

七ヶ浜在住の会員に、住人ならではの七ヶ浜町の魅力をお聞きしました。

▶津田修さん（23 期）

おすすめは風光明媚と称される町のビュースポットです。松島四大観のひとつ「偉観・多聞山」。偉観を楽しむには、まず、多聞山展望広場公園に車を停め、案内板に従い毘沙門堂まで行き、その毘沙門堂の裏側に広がる景色が松島四大観の「偉観」と呼ばれる眺めです。(七ヶ浜町ＨＰより)　手前に馬放島、遠くに桂島や金華山等も見えます。今年初めの松島四大観「麗観富山」での研修では、松島から七ヶ浜を眺め、明治天皇の頃にはない火力発電所の白い煙突が目につきました。逆に、多聞山から松島を眺めると、街並みは変わっているのでしょうが、景色そのものはあまり変わっていないように思えます。個人的には桜の時期がおすすめですが、朝日に照らされた海を幾つかの船が行きかい、昔と今との違いを感じながら過ごすのも良いものです。展望広場公園ではフリーWi-Fi が利用できます。

帰りに、大木囲貝塚に隣接する郷土資料館に立ち寄って、昨年来、皆さまに手入れ頂いている表浜の貝塚や土器の展示を見て頂くと、一層、緑地公園の整備に力が入るかも知れませんね。一度、車を走らせて、多聞山にお越しください。

また、町は国際交流にも積極的で、七ヶ浜国際村が30 周年を迎えました。まもなく国際村のホームページでこれまでの歩みが公開される予定です。

▶森谷清一さん（17 期）

おすすめは、トライアスロン大会が開かれるなどスポーツの町でもある七ヶ浜町の充実したスポーツ施設「アクアリーナ」です。海を見ながらのリゾートフィットネスが楽しめます。マシンが備わったトレーニングルーム、水中ウォーキングやサウナ・ミストサウナ、海水のお風呂「海みつあみ」などのフィットネスプール、卓球やバトミントン、室内ランニングができるアリーナなど、マッサージチェアも備わり、陽光あふれる室内で松林を望みながら、快適に運動が楽しめる施設です。60 歳以上なら平日 440 円で利用できますよ。

七ヶ浜健康スポーツセンター　アクアリーナ
避難所にもなる柔構造の建物です。屋根の勾配や屋根を支える構造をご覧になってください

松島四大観　「偉観・多聞山」

震災後まもなくの活動ではボッケやワタリガニに舌鼓を打ったものでしたが、最近はお目に掛かりません。長らく「ボッケまつり」を開催していたのに最近は取れなくなって今年は海苔まつりとなりました。

▶渡辺淳さん（12 期）には、七ヶ浜の味覚、グルメをお尋ねしました。

温暖化で海の状況が一変し、海産物に大異変が起きています。昔から捕れていた魚介類が捕れなくなり、取って代わったのが南の海域に住んでいるマダイやタチウオ。はえ縄や刺し網にかかったとしても虫がついて商品にはならないこともあり、ある程度の漁獲量は難しくなっているそうです。また、新顔の魚の調理法や食べ方は地域に浸透しておらず、消費者にはなかなか手の出しにくいものになっているようです。温暖化の影響で特に今年の海産資源は混乱状態です。しかし一方明るい話題として、高級食材になる可能性があるトリガイの養殖に取組み始めているとのことでした。ブランド化した丹後トリガイは市場で高級食材となっています。どこまで品質と大きさを近づけることができるか、どのように市場に出していくのかがこれからの課題だそうです。

陸の産物ではルバーブに注目。避暑に来る外国人が持ち込んだ北欧の野菜です。震災から１０年の 2021 年、被災地の植物や農作物の種を宇宙に飛ばし、帰還した種を地域活性化につなげるプロジェクトがありました。七ヶ浜町では「宇宙の桜」と「七ケ浜宇宙ルバーブ」として帰還した種を植えつけました。ルバーブは県の試験場で苗にしてもらい、希望する農家や一般家庭に配布しました。酸味がある野菜でジャムやパイにすると超美味です。

町ならではのグルメは復興途中で、まずは賑わいづくり。ながすか多目的広場の一角にはキッチンカーやアクセサリーなどの小物の出店が集います。会員の皆さん、繁盛して町に定着できるよう応援してください。

安全のページ

転ばぬ先の杖

20期　木村　武

苦い経験を一つ。先日、自動車運転免許証更新で長く所持していた優良運転者の証である「ゴールド免許」が「ブルー免許」に格下げに。教官から高齢者の交通事故について滔々と話があり、明日は我が身と受講しました。宮城県の令和 3 年交通事故死者 42 人の内24人が高齢者であり高齢者(65歳以上)の死傷事故は5割以上を占めます。傾向としては歩行中の事故が他の世代と比較して4倍以上。全人身事故のうち高齢運転者が第一当事者となった割合は令和3年で23.4%を占める。原因は安全不確認の割合が最も高いとの事。高齢者事故の発生場所は交差点や店舗や病院の駐車場等での発生割合が他の世代と比べて高いそうです。ブレーキの踏み違い事故は7件発生。事故原因、発生場所、踏み間違い全てが高齢者ならあるあるです。

自動車は人や荷物を目的地に運び、エアコン等があり便利で快適な乗り物です。その反面、自動車は「走る凶器」と呼ばれたこともありました。「凶器(狂気)」なドライバーにならないよう交通事故を少なく、また巻き込まれないように知恵を絞るしかありません。運転に際しては一番大事な事は「慎重」であることです。

協会員・ボランティアの皆様の間では高齢者マーク(四つ葉マーク)のステッカーを貼ることが今やちょっとしたブームになっていると聞きます。高齢者マークを車に付けていると周りのドライバーも注意して運転でき、自分自身も年齢を自覚してより注意深く安全運転することができます。「四つ葉」は幸せの象徴でもある四つ葉のクローバーと、シニアの「S」が組み合わされたデザインを採用したそうです。自分と周りの人の安全のためにも、70歳になったらステッカーを付けない「年齢詐称」ドライバーは諦めて、ステッカーを付けた素敵な高齢者ドライバーになりましょう。そしてクルマも人生も安全運転でワンダフル・ワールドを探しに出かけてはいかがでしょうか。

君といつまでも ♫

リレー式会員の広場

新米インストラクター悩みながらの引率

２２期　郷古　萬里子

６月７日㈬「岩沼・荒浜潮除須賀松の森」において仙台大学附属明成高等学校３学年による「海岸防災林保育活動」が実施されました。私は引率として、７名の元気のいい男子ばかりのグループを担当しました。

早速活動に入り、まず植物観察からです。講師は亀ちゃん（22 期生）です。亀ちゃんはおもむろに葉っぱを取り、葉っぱ爆弾をするのです。勿論、生徒は呆気にとられています。ちなみに私は「なんで葉っぱ爆弾なの?引率の私ができないネタをやるなんて！ヤメテクレ～」と心の中で悲鳴を上げていたのです。

そんな私の心の中とは裏腹に、講師の助言をもとに生徒たちは次々とできるようになり、喜んで「ポン」「ポン」と飛ばしています。私も何とか１回だけはできましたが、「修行が足りない」と檄が飛んできそうでした。

令和４年３月に森林インストラクターとして認定されましたが、昨年度は足の故障で活動できませんでした。足の状態は完璧ではないので、今年度は可能な範囲で活動に参加していますが、上記のような未熟な私です。まだまだ修行（学習・経験）が足りないことを痛感しています。どうしたら子どもたちに興味・関心を持ってもらえるか、悩みながらの引率です。

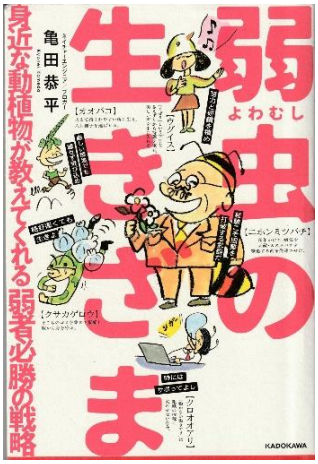
そんな私ですが、子どもたちと接することがとても楽しいのです。私の一言で、子どもたちが素早く反応してくれた時は尚更です。今後とも、経験・知識共に豊富な諸先輩に教えていただきながら自然の不思議を体験し、レベルアップを図るよう努力していきたいと思います。自然の営みに対して「どうしてかな?」と疑問を持つことで、より深く自然に関心を持ってもらえる楽しい活動を、子どもたちとともに行っていけたらと思っております。

どう？　こうすると格好いいかも！

次回は　22 期亀ちゃんこと亀井利光さんにバトンタッチします！

読書案内

会報委員が興味深い本をご紹介！



私が紹介する本は『弱虫の生きざま』(KADOKAWA)という本で、著者は亀田恭平「ネイチャーエンジニアリングいきものブログ」のブロガーで、システムエンジニアの傍ら、自分の目・耳・肌で確認した様々な生き物の魅力をブログで紹介しています。

特に野鳥コーナーは、野鳥観察に必要な双眼鏡やカメラといった道具の選び方から、野鳥の生態等幅広い内容で多くのことが紹介されていて、私の野鳥観察のバイブル的存在です。そんな彼が昆虫の「変態」や野鳥の「渡り」などを例に挙げながら、初めて執筆した本です。地球上では様々な生き物がくらしていますが、強いものだけが生き残っているわけではなく、弱いものも子孫を増やす手法を長年の進化の過程で身に付け生き残り、多様な生態系を作り出しています。そんな身近にいる弱虫の「生きざま」が、弱者必勝の戦略を今に生きる我々に教えてくれます。弱い生物たちが進化の過程で身に付けた能力には、いまだに解明されていないものも多く、そのような“自然の不思議”に興味をそそられます。

この自然の不思議さに目を見張るような感性を「センス・オブ・ワンダー」といい、幼少期には誰もが持っていて何かを探求していく最初のモチベーションになるものと言われています。私もイベントで時々子供たちの引率を担当しますが、自然観察を通じて、少しでも子供たちの「センス・オブ・ワンダー」に火をともすことが出来ればと、悪戦苦闘しています。　（20 期　髙橋　秀）

開催決定　令和７年第 48 回全国育樹祭

育樹祭は、継続して森を守り育てることの大切さを国民に伝えるため、昭和 52 年から全国植樹祭を開催したことのある都道府県において、公益社団法人国土緑化推進機構と都道府県の共催で毎年秋に行われています。全国植樹祭で天皇皇后両陛下がお手植えされた樹木について、皇族殿下によるお手入れ行事（枝打ち・施肥等）や各種表彰等の式典行事が行われます。（令和５年は茨城県、令和６年は福井県で開催）

宮城県では「持続可能な森林づくりの継承」「伝統と新技術による木材利用の発信」「震災の伝承と新たな価値の創造」の３つを開催理念として開催します。会場は次のとおりです。

○ お手入れ行事会場：国立花山青少年自然の家南蔵王野営場（白石市）（第４８回全国植樹祭（平成９年）会場）
○ 式典行事会場：セキスイハイムスーパーアリーナ（利府町）　（宮城県総合運動公園総合体育館）

詳しくは宮城県の全国育樹祭推進室のホームページをご覧ください。

今後プレイベントが計画されていきますので、会員の皆様、ご協力宜しくお願いします。

＝令和５年度役員紹介＝

髙橋孝紀	（14 期）	会長
蜂谷仁	（12 期）	副会長兼施設管理事業部長
大浪幸子	（8 期）	副会長
髙橋秀	（20 期）	事務局長
菊池茂	（22 期）	総務部長
福士實美	（17 期）	経理・契約部長
富井常雄	（14 期）	安全対策部長
原田良一	（14 期）	広報部長
小島恵子	（9 期）	広報部副部長
鈴木茂	（20 期）	研修部長
亀井利光	（22 期）	研修部副部長
遠藤一正	（22 期）	環境・森林事業部長
横坂圭一	（22 期）	環境・森林事業部副部長
加藤宏	（12 期）	監事
渡邉淳	（12 期）	監事
木村健太郎	（1 期）	事務局次長兼企画部長
佐藤由美子	（6期）	事務局次長補佐兼経理・契約部次長

編集後記

▶処暑を迎えて虫の音が聞こえる季節となりました。ここ数年、仙台でもアオマツムシの声にかき消されるようにヤブキリ、ウマオイなどの姿が見られなくなってきています。生物多様性保全の観点からもとても心配なことです。さて、生物や文化の根絶はアーカイブ化されたときから始ると考えております。近い将来、在来のキリギリス類やコオロギ類の鳴き声をメディアでしか聞けなくなることで絶滅を知る事になるのではと危惧しております。そんな未来が来ないように、私たち宮城県森林インストラクターの出番ですよ！（８期　石川　似子）

七ヶ浜特集　22 期生の森「フォレスト22」

２２期　菊池　茂

事務局より「七ヶ浜町表浜の一画を２２期生で管理しないか」とのお声がけを頂き、活動でいつも一緒になる22期生のメンバーに相談し「先ずは刈払いから」で２度の刈払いをしました。草は伸び放題、石はゴロゴロ。そんな中計画書を作成事務局へ提出、第１回活動現場での朝のミーティングには事務局から木村さんにもお越し頂き「なつかしいお顔もお見受け出来ますね」とのコメントを頂き、また七ヶ浜町表浜の土地の説明も頂きました。１回目の活動には１３名参加（２９名中）で刈払い機の扱い方の練習も兼ね草刈り作業を行いました（女性も刈払い機で活動しました）。２回目の刈払い活動時に事務局から篠澤さんに来て頂き「ここで刈払い機の練習をして使えるようになるといいですね」とのコメントを頂きました。私をはじめ、ちょっと慣れてない方にはちょうど良い練習になり大変楽しかった事を覚えております。活動の後の弁当も格別です。２２期生の活動には打合せがつきもので「どんな森にするのか」「何を植えるのか」「花壇を作ろう」「ベンチを作ろう」等々打合せは約３０分、あとは懇親会の始まりです（まあ、毎回、懇親会が主ではないかと思うほどの盛り上がりです）。つい最近我々のお手製看板「フォレスト２２」が完成、設置致しました。事務局の方々にもご協力頂き素敵な看板に仕上り感謝の気持ちでいっぱいです。花壇も看板も出来て一服していたら「草が伸びてきたぞ！」「次は何を植える？」と、２２期 LINE でのやりとりが始まっております。「事務局との打合せ、計画書作成、道具準備、道具運搬、活動説明、準備体操、活動、後片づけ、反省会」。なんとも言えない達成感が有ります。このような活動の場を準備して頂いた事務局に感謝申し上げます。さあ又打合せ＆懇親会をやって活動開始だぁっ！！

発行　特定非営利活動法人　宮城県森林インストラクター協会
〒981-0121　宮城県宮城郡利府町神谷沢字菅野沢４１　青少年の森
TEL&FAX：022-255-8223
メール：mifi@bz04.plala.or.jp　HP：http://mifi.main.jp